
碌でもない奴は碌でもない仕事に就く

坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碌でもない奴は碌でもない仕事に就く

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

隣のDQN、さっさとどうにかなれと思っていた彼が就職したが、ユーチューブの漫画動画のオマーージュ作品です。

第一章

碌でもない

奴は碌でもない仕事に就く

貴蔵一民と聞いてだ、彼の隣の家で学年では一年下の須藤慎吾は顔を顰めさせて言った。

「あいつかよ」

「あいつ呼ばわりかよ」

「いつも迷惑しているんだよ」

細い吊り目と色黒の肌が目立つ顔で言った、黒髪を真ん中で分けていて背は一七二位絵痩せている。今は高校二年生である。

「本当にな」

「評判悪いよな」

「学校でもな」

「中学からな」

友人は須藤に述べた。

「底意地悪くてさぼってばかりでな」

「人の悪口ばかり言ってるな」

「イキリでな」

「何かあると偉そうに言ってるな」

「自分は何もしないな」

「煙草吸ってるな」

そうしたこともしてというのだ。

「その癖成績学年最下位クラスでな」

「喧嘩も弱いな」

「そんな奴でな」

「死ねばいいんだよ」

「お前も嫌いなんだな」

「嫌い？違うよ」

須藤は友人の今の言葉を即座に否定した。

「本気で死ねばいいって思う位にな」

「大嫌いか」

「超だよ、真夜中に騒いでな」

「寝られないか」

「しかも空き缶うちのところに捨てるんだよ」

「家に迷惑言ってるな」

「その都度親にな」

そうしているというのだ。

「手前の息子何とかしろってな」

「苦情言ってるんだな」

「ああ、中学の頃はあいつにいじめられていてな」

「今度はそれか」

「ああ、本当に死んで欲しいよ」

こう言うのだった。

「あいつはな、どうせな」

「どうせ？」

「碌な奴にならないだろ」

このままいくと、というのだ。

「だからな」

「死んで欲しいか」

「とっととな、それで何で俺にあいつの名前出したんだよ」

「聞きたくないか」

「そこまで嫌いだよ」

「お隣だと特にか」

「というかあいつ好きな奴いるのかよ」

須藤は友人に問うた。

「世の中にな」

「俺達の間でも評判悪いしな」

「一つ上の先輩の間でもだろ」

「同級生にも偉そうで底意地悪いらしいな」

「頼む時だけへらへらしてな」

「凶々しくて卑しいともな」

その様にもというのだ。

「有名だしな」

「そんな奴好きな奴いるか」

「皆嫌いだな」

「人間の屑だよ、だからな」

須藤は忌々し気に言い切った。

「大人になっても碌な奴にならないさ」

「ヤクザ屋さんにでもなるか」

「その下っ端な、何か悪いことしてたらな」

「警察に通報するか？」

「そのつもりだよ、とっとといなくなれ」

兎に角だった。

須藤は隣の家の貴蔵に迷惑していて忌み嫌っていた、その将来は碌でもないものだと思信していた。

だが貴蔵は高校を卒業すると何処かに就職していなくなった、須藤はこのことにまずはよかったと思ったが。

それでも確信してだ、友人に言うのだった。

「絶対に碌でもない仕事しかな」

「働き口ないか」

「あんな奴まともな人雇うか」
友人に対して言った。

第二章

「だからな」

「まともな仕事に就いてないか」

「お前もそう思うだろ」

「そう言われるとな」

友人も彼のことを知っているからこう答えた。

「あんな奴はな」

「そうだろ、本当に犯罪に関わってるってわかったら」

「通報するか」

「証拠掴んでな、お前もするか」

「俺もあいつ嫌いだよ」

「好きな奴いないからな」

「じゃあな」

須藤に述べた。

「俺もな」

「宜しく頼むな」

「その時はな」

こうした話をしてだった。

二人はそれぞれの日常も過ごしていった、二人共大学に進学し就職もした。須藤は実家暮らしで働いていたが。

東京で働いていた友人が同窓会で地元に戻って来るとその同窓会場で言った。

「貴蔵の馬鹿だけれどな」

「ああ、あいつか」

友人もすぐに応えた、共に同窓会の会場の居酒屋の貸し切りの場

所でビールのジョッキを片手に飲んでいる。

「どうしたんだ？」

「就職したけれどな」

「碌なところじゃなかったか」

「詐欺会社だったんだよ」

須藤は笑って話した。

「これがな」

「ああ、やっぱり悪い会社に入ったか」

「羽毛布団がどうかオレオレとかやるな」

「そういうのの王道だな」

「それでその会社に警察が入ってな」

そうなってというのだ。

「あいつもな」

「捕まったんだな」

「そこで窃盗とかの余罪も見付かってな」

友人に実に楽しそうな顔で話していくのだった。

「刑務所に入って前科もな」

「ついたんだな」

「ああ、そうなってな」

そうしてというのだ。

「今は臭い飯食ってるよ」

「当然みたいな結末だな」

「そうだよな、被害者の人達からも訴えられてるし」

「詐欺の被害のか」

「あと傷害事件もわかったしな」

「本当に碌でもない奴だな」

「それで前科色々付いて民事も何かと出来てな」

そちらの案件もというのだ。

「賠償金払わさせられることになったよ」

「逃げられないよな」

「踏み倒そうと思ったら」

その時のことも話した。

「わかるよな」

「逃げられないよな」

「それこそ内臓売ってでもな」

そうなることも友人に楽しそうに話した。

「有り得るな」

「そういうことだな」

「だからな」

そうなるからだというのだ。

「もうあいつはな」

「終わりだな」

「人生自体がな、絶対に碌でもない仕事に就いてるって思ってたらしい」
そう確信していたらというのだ。

「やっぱりだな」

「碌でもない末路迎えたな」

「ああ、ざま見ろだろ」

「それ皆思うよな」

「ああ、皆にそう思われる位の屑はな」

「そんな結末しか迎えないな」

「そうなるのがヲチだよ」

友人にビールを飲みつつ心から喜んで話した、そして隣の家が息子が捕まったのでそのことを言われて夜逃げして後に来た人達は普通の一家だということも話した、語るその顔は実に嬉しそうなもの

であった。

碌でもない奴は碌でもない仕事に就く

完

2024・1・21

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~29153

碌でもない奴は碌でもない仕事に就く
2024年01月21日 21時51分発行